

# 昭憲皇太后と富岡製糸工女のエートス

山 崎 益 吉

The Shoken Empress and the spirit of factory girls in Tomioka Silk Mill

Masukichi YAMAZAKI

## Summary

These days, people are more interested in world heritages. People in Tomioka city, Gunma prefecture are interested in world heritages as well. People in this area hope to register world heritages legally as soon as possible. At one time, as registration of world heritage in Hiraizumi was postponed, the registration of Tomioka Silk Mill and the places of historic interest were greatly worried. But historic interest of Hiraizumi was registered in 2011. Currently Tomioka Silk Mill and the places of historic interest are expecting to be registered next. In these circumstances, I lectured on The Shoken Empress and the spirits of factory girls in Tomioka Silk Mill at Meiji Shrine on November 9th 2011. The Shoken Empress visited modern factory, Tomioka Silk Mill on June 24th 1873. I spoke about the impact of visit of The Shoken Empress in my article. I also wrote on the same theme for my lecture for the magazine, "Wakaba"(No.46). As I could not express my thoughts enough in this article. Here I will fully deal with the impact of The Shoken Empress in Tomioka Silk Mill.

## 1. はじめに

富岡製糸場を中心とする絹産業遺産群が世界遺産に暫定登録され、本格的な登録に向け期待が高まっている。一時、平泉ショックもあったが、世界遺産に登録されるにおよんで、「次は富岡製糸場と絹産業遺産群だ」と大きな期待が寄せられている。

筆者はこれまで機会ある毎に富岡製糸場について触れてきた<sup>1)</sup>。世界遺産の本格的な登録に向け各種厳しいハードルをクリアしなければならないことを、平泉などの経験がよく教えている。それが証拠には、群馬県が本格的なプレゼンテーションに向けて苦慮している実態を見れば明

らかである。最近、対象範囲を絞り込まざるをえなかったことを考えるまでもなく、苦慮のあとが伺える。何を大黒柱に据えたらいいか、実に至難の業である。絞り込んだとはいえ、まだ多岐にわたっている点は否めない。そこに難しさがある。さらに、ユネスコの総量規制の問題が絡んでいるからなおさらであろう<sup>2)</sup>。

今回はこれまでほとんど触れられてこなかった昭憲皇太后と工女のエートスについて論じてみたい。本稿をおこすきっかけとなったのは、明治神宮崇敬会婦人部の講演ならびに機関誌『わか葉』への寄稿にある。講演ならびに寄稿文の題名は『昭憲皇太后と富岡製糸場の工女<sup>3)</sup>の精神』であったが、双方において十分意を尽すことが出来なかったこと、とくに寄稿文では大幅な紙数の制約もあって十分展開できなかったゆえ、改めて稿をおこす必要に迫られたからである。

これまで筆者は西洋列強に対抗するために明治新政府が採った富国策の視点から、原型を横井小楠の『国是三論—富国論』(万延元年、1860年)をよりどころに、伊藤博文、大隈重信などの新政府の要人と渋沢栄一、尾高惇忠などの視点で問題の核心に迫っていった。横井小楠の筋書きで近代日本の富国策が展開されたことは、福井藩のそれに典型的に示されているとおりである<sup>4)</sup>。さらに、中身を追求していくと工女の製糸にたいする情熱がどこからきているのが問題視されねばならないと考え、裏付けるため深谷、松代の儒教(朱子学)の足跡を追った。深谷では渋沢栄一、尾高惇忠の

写真1



富岡製糸場行啓(荒井寛保方面)、『聖徳記念絵画館壁画』より

バックグラウンドがともに儒学にあることを確かめた。尾高の娘ゆう、『富岡日記』にみる和田英の心意気さらに士族の子女が尾高の薫陶を受けて一心不乱に糸取りに精を出した理由を深谷学、松代学ともいうべき精神風土のなかに見いだしてきた。渋沢は『論語』尾高は陽明学という制約もあるが、大きく括れば儒教ということになる<sup>5)</sup>。

これまで、皇族関係者が富岡製糸場に関係していたことは『富岡製糸場誌 上』に出てくる範囲でしか捉えていなかった。また、富岡製糸場正面に建つ行啓記念碑の存在は知っていたが、関心はさほどなかった。皇族が日本の近代化に関わってきた一般的な問題がぬぐえなかったから

である。行啓記念碑が徳富蘇峰の手になれる点も気になっていた。蘇峰は横井小楠と関係が深いからさほど抵抗はないと思っていたが、晩年の蘇峰には賛同しかねる。それゆえ行啓記念碑は素直に受け入れられなかった点は否めない。しかし昭憲皇太后は養蚕に理解があり、病院を慰問されたり、産業振興に努力されたりした姿は皇室とはいえ一人の人間として評価すべきではなかろうか。とくに本稿で展開する富岡製糸場への行啓時の御歌「いと車・・・」は、その後工女に大きな影響を残す結果となったことを考えれば、一度整理しておく必要があるのではなかろうかというのが、本稿の狙いである。

## 2. 富岡製糸場への行啓

昭憲皇太后の行啓は和田英の入場に後れること約2ヶ月余のことである。明治6年6月19日赤阪仮皇居を立たれ、途中大宮、熊谷、新町、吉井経由で23日に富岡に到着している。道中記をみると梅雨と重なって大雨となり総勢100人あまり、一行は困難をきわめた。鮎川や鐺川の橋が落ち船で渡ることになったので、地元では大騒ぎになった。「鮎川は岩鼻川より小舟を漕ぎ上げて船橋を作りて通御」とかまた「鐺川は橋梁落ちたるため船にて御渡りあり」とある。翌24日県令河瀬秀治の先導にて入場、所長尾高惇忠の案内で機械製糸の実態を視察している。ブリューナ夫妻は自国の料理で歓待し、さらにピアノ演奏で旅の労を癒したと伝えられている。

工女はどう対応しただろうか。まず、明治6年当時の練習生白石はなの談話を聞いてみよう。「当日は選抜せられたる7、8名の練習生のみ操作、私もその人数の中に加えられて賤が手業をご覧に入れたる事は誠に光榮たる事にてその時の工場内の模様は今なお目にある心地です。私の釜は門釜なりしたため尊き御方に最も御身近かに位置して操作、余りの畏れ多きに目くらむ思ひなりき、唯釜の湯の御召物にかからぬ事をのみ気に病みたり・・・<sup>7)</sup>」。さらに『富岡日記』で有名な和田英は次のように伝えている。「いよいよ当日になりました。場内は実に清潔に掃除してあります。・・・正門よりブリューナ氏尾高氏御先導申し上げまして、三等台はずれ繭えりを致して居る所までしずしずと御行啓なりまして、繭をご覧になりました。この時まで蒸気も車も止めてありましたが、その所へ御行啓になりますと同時に、蒸気を通し車も運転を致しました。それまで工女一同襷をはずし、手を膝に置き下を向いておりましたが、その時直に襷をかけ業を致しました」。この後尊敬の念と同時に視察の様子が述べられている。「神々しき竜顔を拝し奉り、自然に頭が下がりました。・・・正門の方へ御戻りになります時、下から二切り目の北側の角から五六釜目に私はその頃居ました。その後釜に仏国人のアルキサンと申す人が三釜の人をわきよせてその場に入りまして、糸を繰ります所を御覧に入れました。二十分位その前に、両陛下御立ち遊ばされまして、ご覧になりました<sup>8)</sup>」。ここから英自身の感想が続く。「私はその頃未だ業も未熟でありましたが、一生懸命切らさぬように気を付けて居りました。初めは手が震えて困りましたが、心静めてようよう常の通りになりましたから、私は実にもったいないことながら、この時竜顔を拝さねば生涯拝することは出来ぬと存じましたから、能く顔を上げぬようにして拝しました。この時の有難さ、只今まで一日も忘れたことはありません<sup>9)</sup>。私はこの時、もはや神様とより外思いませんでした」。昭憲皇太后は「神様」扱いになった。記念として扇子を拝領している。その件を英は「程立ちまして、菊・桐の銀箔で

御紋章の付きました御扇子を工女一同拝領致しました。只今に実家の方に大切に秘蔵致して置きます」と述懐している<sup>10)</sup>。高崎藩の飯野みさ子刀自も「明治6年には皇后陛下が富岡製糸場に行啓あらせられ親しく製糸工女の実況等をご覧に相成私等工女一同へ紺緋一反、二子縞袴一反づつを御下賜になりましたが、其頃には汽車はありませぬ為め御馬車でならせられたので富岡の町は大変の大騒ぎになりました<sup>11)</sup>と、昭憲皇太后の行啓を活写している。

昭憲皇太后の富岡製糸場への行啓はほんの数時間にすぎない。しかし工女に与えた衝撃は計り知れず、英のように神様扱いになっていることによって領けよう。工女たちは中学生や高校生くらいの年代であるから、国家的独立を背景に激励にやって来た昭憲皇太后の姿に驚かされたことは当然と言えよう。行啓で詠まれた歌が

いと車とくもめぐりて大御代の富をたすくる道ひらけつつ

である。歌の中に新生日本の置かれた立場が見事に詠まれている。「いと車」は英が「車、ねずみ色に塗り上げられたる鉄<sup>13)</sup>」と驚いて書いているように、国家的独立の原動力であった。西洋に負けない経済力を身につけることが出来るとの期待が「いと車」に込められている。いと車、金車によって近代日本の富が形成され西洋に追いつき追い越すことが出来るとの期待が込められているからである。「いと車・・・」は当時流行していた「糸繰る車はかな車」を念頭に置いていた。昭憲皇太后がやってきたのは明治6年6月であるから操業から一年余にあたる。流行していた「かな車」の歌を知らないはずはないだろうから、「いと車・・・」が自然に詠まれたと見ていいであろう。当時流行していた歌を掲げておこう。

上州一宮 あづまの二階

椅子に腰をかけ 遙か向ふを眺めれば

あすこに見えるは ありや何処だ

写真2

あれこそ上州の 甘楽郡

音に聞こえし 富岡の

西洋造りで 木はいらぬ

廻りはしごで 屋根瓦

窓や障子は ギヤマンで

糸繰る車は かな車

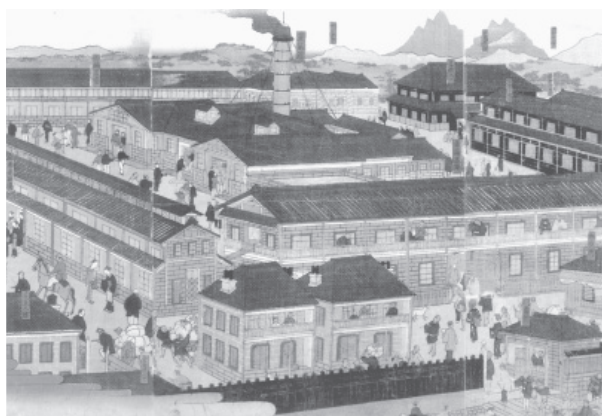
あまたの子供は 連だちて

髪は束髪 花やうじ

紫袴を 着揃へて

縮緬だすきを かけ揃へ

糸繰る姿の ほどの良さ<sup>14)</sup>



創立当時の富岡製糸場全景・錦絵、世界遺産推進課提供（群馬県）

当時、「上州一宮 あづまの二階」で始まる富岡製糸場を讃えた歌がいかに流行していたかは、越後高田の瞽女によって取り入れられていることによっても領ける。アレンジ調の「越

後高田瞽女伊勢音頭上州富岡製糸所」は「上州一宮 あづまやの二階」を高田瞽女によって取り入れられ歌いやすく改良されている。富岡製糸場が操業して間もなく「上州一宮 あづまやの二階」が出来たと思われるが、富岡が活気に充ちていたため富岡にあやかろうとして高田瞽女によって歌われたものである。富岡製糸場が操業するに及んで富岡は一躍日本の中心地として脚光を浴びることになる。二千人足らずの寒村から近代日本の国家的独立を一身に担って伝習工女の育成にあたったわけであるから、「上州一宮 あづまやの二階」に関心が集まるのは当然であろう。富岡を見習え、富岡にあやかろうとする所が出てきてもなんら不思議ではない。高田瞽女による「越後高田瞽女伊勢音頭上州富岡製糸所」の歌もその代表例である。高田瞽女は富岡製糸場設立と同時に流行した「上州一宮・・・」を取り入れ、伊勢音頭風にアレンジし、大衆受けするように組み立てられた。伊勢音頭風、三味線つきの「富岡製糸所」は景気よく次のようにアレンジされ、歌われた。

上州イエエエ・・・

一ノ宮	あづま屋の茶屋で
椅子に腰掛け	遙か向うを眺むれば
あれこそ上州の	甘楽郡
音に聞こえし	富岡よ
糸とり車は	金車
178なる	女郎衆が
髪ははやりの	束髪よ
縮緬だすきを	あやにとり
もみじのようなる	手をだして
糸とる姿の	美しや
アリヤリヤン	コリヤリヤン
アレワイサイノセ	<sup>15)</sup>

調子よく歌いやすくするため歌詞も変えられ、付け足されたり、削除されたりしているが、肝腎の「いと車 かな車」はそのままで使われている。変更箇所をみておこう。「あづまやの二階」は「あづま屋の茶屋」、「音に聞こえし 富岡の」は「音に聞こえし 富岡よ」、「髪は束髪 花やうじ」は「髪ははやりの 束髪よ」、「縮緬だすきを かけ揃え」は「縮緬だすきを あやにとり」、「紫袴を 着揃えて」は「紫袴を 掃き揃え」、「糸とる姿のほどの良さ」は「糸とる姿の 美しや」にそれぞれ変えられている。「茶屋」、「富岡よ」、「束髪よ」、「あやにとり」、「掃き揃え」、「美しくしや」に変えられているが、このほうが世俗的で歌いやすかったのであろうし、聞くがわにインパクトを与えると考えられたからである。「アレこそ西洋の糸機械」、「西洋造りで 木はいらぬ」、「あまたの子供は 連だちて」、「廻り梯子で 屋根瓦」、「窓や障子はギヤマンで」などは変えられた歌には詠まれてはいない。付け加えられた歌詞もある。たとえば、「ぐるりは煉瓦で 屋根瓦」、「178なる 女郎衆が」、「もみじのようなる 手を出して」などはごく身近に感じさせるためである。女郎衆というところに世俗に徹しようとする意図が伺

える。この方が親しみやすかったのか。大衆受けするには工女では固すぎ、ましてや紅女では受け入れてもらえまい。女郎衆、若い娘が一番似合っていたのである<sup>16)</sup>。

こうした雰囲気の中、昭憲皇太后が来県し、「いと車・・・」の歌を詠んだとしてもなんら不思議ではない。和歌に長け在世中に三万首も詠まれた昭憲皇太后は、糸車で活気づく富岡をごく自然の姿で詠まれたのであろう。「いと車・・・」の歌は、後述するように、原製糸時代に会社ぐるみで歌われるようになる。

富岡製糸場で昭憲皇太后は「いと車の・・・」外に

とる糸のけふのさかえをはじめにてひきいたすらし国の富岡

を詠んでいる。こちらのほうは糸によって近代化を図る原動力が富岡にあるときっぱりと言い切る。「国の富岡」と全国的レベルで語られるようになった。

### 3. 「いと車・・・」の影響

富岡製糸場は明治26年三井に、明治35年原製糸に経営が移る。原製糸時代経営の合理化が進み恩恵に浴している様子が直に工女の口から語られている。待遇もよかった。ある工女はこう述懐している。「原時代は優勢で、良い時代であった。どうしてこんなに楽しいものかと思った。だんだん仕事になれて楽になるし、お金は上がってくるし<sup>17)</sup>」。賃金について工女の対談を聞いてみよう。

司会「だいたい40円くらいにはなったのですか」。

高橋「45円から50円になったの」。

田島「私が大正の終わりに教員になって48円です。大正15年に50円だけれども当分48円というのです」。

戸塚「だから工女さんはいい金を取ったんだね」。

高橋「そうですね。だから一生でもいいと思いましたよ。それで通勤の人には工場を安くしてくれたのですよ。一斗づつね。それが一斗三円五十銭くらいだったかな。給料は教員と変わらなかったというから恵まれていた」。

余暇はどうか。

司会「素人演芸会の外どんな楽しみがありましたか」。

戸塚「映画を見に行ったり、芝居や演芸会を見に行ったり。一ノ宮さんをお参りに行くのが中心でしてね。必ずお休みには歩いていきました」。

司会「映画はどこで見たのですか」。

戸塚「映画は電気館、芝居は中村座、富岡座もありましたね」。

習い事もあった。

阪本「工場には裁縫の人が入っていて、仕事がおしまいになるとみんなやっていた。先生は一人で、裁ち板のまわりにすわって並んで、先生がまわって教えた。・・・ほぼ7

時から9時（9時消灯）までで外からの人も家に帰って裁縫道具を持って習いに来た。原製糸で月謝を払っているのも無料だった……外にお花の先生も来ていた。一時なぎなたもやった……」<sup>18)</sup>

このほか原時代には花見も盛大に行われ「原製糸の花見」として富岡の町の名物になっていた。「食事も良かった」とある工女が述懐している。「天長節だけは仕事が休みになるので赤飯の折り箱を出してくれた。春のお彼岸の中日と、お盆にはおはぎをつくって出してくれた」<sup>19)</sup>。

総じて原時代の工女は恵まれていたと言っていい。大正という時代的な背景もあったが良き経営者をえたことが最大の要因であろう。その原時代何と言っても特質すべきは、原製糸時代を支えた御歌「いと車……」の存在である。座談会是这样伝えている。

司会「ところで、あの時分工場の歌というのは、いくつ位ありましたか。

田村「ずい分ありましたね。考えたら「鳩が鳴きます」、「天にあおぐ日の光」、「くるりくるくるいと車」、そういうのがありましたね。

私たちのはいった頃にはその歌と昭憲皇太后様の「いと車とくもめぐりて大御代の……」歌がありました。

司会「田村さんその歌をうたってください。

高橋「鳩の歌は知らないですよ。

田村「あの五十年祭の時教わったんですよ。弘田龍太郎と北原白秋がきましたね。

司会「実際に見えたわけですね。

田村「ええ、来ました」。

司会「ちょっと歌って下さい」。

田村「くるり、くるくる、たゆまずめぐる。我が糸車、元車。元気にめぐる、車をみれば、心も勇み、手も勇。とりゆの中には、まゆをとり、空にもあさまのヨイサ、煙ぞのぼる（運動歌）

それから、こういうものもあります。「天に青空、日の光、お国は上野、北甘楽甘楽、甘楽、北甘楽富岡製糸のふえはなる」<sup>20)</sup>（甘楽行進曲）

さらに別の座談会で、明治35年生まれの土屋よし、新井よし（共に富岡市七日市）は「いと車……」の歌を次のように紹介している。昭憲皇太后御歌もよく歌った。

いと車とくもめぐりて大御代の  
富をたすくる道ひらけつつ<sup>21)</sup>

工女の証言で「いと車……」がよく歌われたことが明らかになった。では「いと車……」は正式にどのように歌われたのか。『国の光』はこの件を次のように伝えている。「本綴りは当製糸場において毎日従業員一同して合掌せしめつつある唱歌を録せるものなり」。続けて、「御

歌は明治6年6月畏くも、昭憲皇太后当所に行啓あらせられし時の御詠にして本所の最も光栄とするところなればここに巻頭に掲げ奉れり。「爾来当所にありては夙夜此の聖訓を奉体して業務に精励し専ら斯業の改善発展に努力しつつあり」と御歌を根底にすえているかが伺える。

原製糸場にはこのほか国学院大学講師齊藤惇氏の工場歌、東京跡見女学校教諭葛原菡氏の運動歌、それに北原白秋氏の手になれる逍遙歌がある。曲はいずれも東京音楽学校教授弘田龍太郎<sup>22)</sup>氏の手によるものである。これらの歌が御歌を念頭に置いているかは作詞を見れば明らかであろう。工場歌、「原富岡製糸所の歌」からみていこう。

#### 第一節

明治の御代のはじめより  
くるまのめぐりをやみなく  
くりだすまゆのいとたえず  
浅間の山ともろともに  
響き轟く汽笛の声

#### 第二節

はるけき海のあなたより  
おほくのたからをひきよせて  
国富をませる富岡の  
みかぼの山は高けれど  
なほも名だかき製糸場

#### 第三節

かよわきものの手さきなる  
わざよりなれる糸すじに  
みくにの富をつなげれば  
妙義の山はたへなれど  
ましてくすしきわざぞこれ

#### 第四節

しばしばみゆきあふぎつる  
ほまれをながくおとさじと  
引きだす糸のひとすじに  
かぶらの川のいときよき  
心あはせてつとむべし<sup>23)</sup>

随所に「いと車・・・」を意識しているかが伺える。第一節の「明治の御代のはじめより」は「とくもめぐりて大御代」に相当しようし、「くるまのめぐりやみなく」は「いと車とくもめぐりて」を連想させる。第二節「国富をませる富岡の」はもう一つの御歌「ひきいたすらし国の富岡」に繋がる。これ以上詮索しないが全体のトーンはまさに「いと車・・・」の延長線上にあると見なしていい。富岡製糸場の置かれた状況を考えたとき、昭憲皇太后の的確な判断

による御歌が同じ製糸所を詠んでいるのであるから付設しても不思議でない。次に葛原齒氏の手になれる運動歌をみてみよう。

第一節

くるり くるくる たゆまずめぐる  
我が糸車 元車  
元気にめぐる 車をみれば  
心も勇み 手も勇む  
とりゆの中には まゆをとり  
空にもあさまの ヨイサ 煙ぞのぼる

第二節

するり するする つきせぬ糸の  
その美しさ清らけさ  
よりよくかけてただ一すじに  
心もみがけよき糸と  
車にかがやく 糸のあや  
みかぼの山にも ヨイサ 光のあらん

第三節

さらり さらさら せせらぎうたう  
鏝の川の瀬の音や  
よどみもあらぬ 心をあわせ  
いそしみはげむ楽しさよ  
みくにのなをあげとみをます  
われらの業こそ ヨイサ まことの幸ぞ<sup>20)</sup>

第一節の「くるり くるくる たゆまずめぐる」「我が糸車 元車」は「いと車とくもめぐりて」そのものではないか。おそらく作詞にあたって、「いと車・・・」を意識してかそれにちかい。明治初年の富岡の雰囲気を表現するとすれば、糸車は避けて通れないからである。全体として昭憲皇太后の御歌に近いと考えていい。「いと車・・・」は字数が少ないが言うことはそう変わらない。字数が少ないだけに印象に残る。

最後に北原白秋の手になれる『北甘楽行進曲』を上げておこう。北原白秋は「いと車・・・」を集大成したと見ていい。

第一節

天に青雲 日の光 お国は上野 北甘楽  
甘楽 甘楽 北甘楽 富岡製糸の汽笛はなる

第二節

桑は百万駄 野は広い 行っても行っても桑畑

蚕 蚕 みなたべろ どんどん食べてもまだあまる

第三節

まゆはお倉に買ひこんだ しこたまそさこい 積みためた  
積んだ 積んだ 繭ぶくろ 妙義も榛名もまだ低い

第四節

糸は黄の糸 白の糸 腕なら娘の粒ぞろひ  
繰っても 繰っても 糸車 川瀬の水よりまだ尽ぬ

第五節

やっころさと担ぐはみな宝 それやれ 大門ひきあけた  
出した 出した 積み出した 輝く宝を積み出した

第六節

富は 富岡 北甘楽 いやいや 日本の名の誉  
富んだ 富んだ みな富んだ 世界の富を引き寄せた<sup>25)</sup>

昭憲皇太后の「いと車・・・」が原因であるとすれば、『北甘楽行進曲』その結果を詠んでいると考えていい。大きくみれば北原白秋も「いと車・・・」を念頭に昭憲皇太后の思いを最大限実現するよとの意図のもとに作詞したのかもしれない。第一節から第六節まで気が抜けない。昭憲皇太后の「いと車・・・」の奥には「富岡製糸の汽笛はなる」、「輝く宝を積み出した」、「富んだ 富んだみな富んだ 世界の富を引き寄せた」があるように思えてならない。富岡製糸場の繰業から約半世紀「富をたすく道が開けて」御歌の通りになった言えよう。富を引き出す国の富岡になった。昭憲皇太后の蒔いた種が見事に花開いたといえる。「いと車・・・」は近代日本を通して工女達のバックボーンとなっていたと考えていい。官営富岡製糸場時代、三井時代、原製糸時代、片倉製糸時代にあっても工女は「いと車・・・」を背に糸とりに専念していったわ

写真3



富岡製糸場正面に建つ行啓記念碑（徳富蘇峰撰）、筆者撮影

けである。

昭和13年富岡製糸場は原製糸から片倉製糸に経営が移る。片倉時代特質すべきは、昭和18年6月24日、70年あまり経って昭憲皇太后の「いと車・・・」を記念する碑が建てられたことである。片倉兼太郎の求めに応じて徳富蘇峰が起案したものであるが、さすが蘇峰である。格調高い。「いと車・・・」の果たした役割がどのようなものであった明瞭に述べられているので、労厭わず掲げておこう。

「生糸は皇国産業の主用品にして海外輸出品の太宗たり。明治初期当局者は生糸の改善と普及を目的として仏人ブリュエナ等を聘し富岡製糸場を設立す。是れ実に明治五年十月となす。爾来模範工場として其の目的を達成せり。是を以て政府は是を民業に移して三井氏原氏を経て遂に片倉の経営に帰し業務念を振へり。

惟うに富岡製糸場の歴史に於て特質すべき一事あり。明治六年六月十九日英照皇太后昭憲皇太后には赤阪仮皇居を発興あらせられ二十三日富岡に着き翌二十四日当時熊谷県令河瀬秀治の御先導にて富岡製糸場に行啓あらせられる。当時所長尾高純忠等に謁を賜ひ特に数名の練習生を選抜し機械製糸の実況を台覧に供し奉れり。当時昭憲皇太后の御歌に

いと車とくもめぐりて大御代の富をたすくる道開けつつ

これに依って如何に行啓の恩召が国産奨励に存したることを拝察するにあまりあらん<sup>26)</sup>。

ここに見事に「いと車・・・」と富岡製糸場の関係が綴られている。蘇峰はこの七十年間「いと車・・・」が大きな役割を担い、今後も「いと車・・・」の役割は大きいといたったのであろう。昭和18年6月といえば戦争に突入して半年あまり、「いと車・・・」は残念であるが別の方向に利用されることになる。

#### 4. 工女と女工

富岡製糸場で働くうら若き女性達は決して女工とは思っていない。工女（紅女）としてプライドをもっていた。もと工女の高橋よし、戸塚ウメは座談会できっぱりと言い切る。

司会「さっきから話に出ているんですけども「女工」とはいわないんですね。富岡製糸場の人は」。

高橋「工女」というんです。「女工」とは云わないんです。

司会「戸塚さんの時もそうですか」。

戸塚「そうです<sup>27)</sup>」

なぜ、「女工」ではなく「工女」なのかは設立当初応募に応じた実態からも伺える。たとえば、高崎藩の士族の娘で最初の工女飯野みさ子刀自は実に興味深い実話を披露している。「私も其勧誘を受け最初の工女として父に連れられて参りましたが其時漸く25人の工女が入所いたしま

したが其中には京都の公家華族中御門明恒と云ふ人の御姫様磐亀と云ふ方も女中を連れて工女となり私らと一緒に製糸を習いました<sup>28)</sup>。山口県の国司チカは「第一回の三十名は多く士族の娘で、17才から30才までで・・・、一同は・・・山口に集まり・・・三田尻港まで取り揃って参り・・・蒸気船琴平丸で出発・・・神戸で一泊、米船ニューヨーク丸に便乗し、横浜へ参りました。私達一行に井上馨の姪二人がいられたので、横浜に着いたら井上馨様が出迎えられました。前年開通した汽車で東京新橋に着し、日本橋馬喰町山代屋に宿をとりました。それから数日高輪毛利邸や東京見物に費し、上州富岡に参りました。その時は付添人などを加え40人が40両の人力車に乗り上州街道を春風の中を進んだので沿道のものほみな外に出てきて、私達一行を珍しげにみていました<sup>29)</sup>」。国司チカは工女の実情をこう披露している。「富岡製糸場の工女といえ大変な権威がありました。大蔵省の製糸場であり入場している者が徳川旗本のお嬢様とか或いは地方の有力な士族の娘達でありましたから町に出ても指一本指されるということはありませんでした<sup>30)</sup>」。松代藩の士族の娘横田英は、出発時に、外見ではなく工女としての意気込みを語っているが、見送りの中にその意気込みが示されている。まず祖父(機応)は「たとい女子たりとも、天下の御為になることなら参るが宜しい。入場いたし候上は諸事心を用い、人後にならぬよう清々励みますように」と注文を付け、父一馬は「さてこの度国の為にその方を富岡製糸場に遣わずに付いては、能く身を慎み、国の名家の名を落とさぬように心を用うよう、入場後は諸事心を尽して習い、他日この地に製糸場出来の節差支えこれ無きよう覚え候よう、仮初めにも業を怠るようのことなすまじく、一心に励みますよう気を付くべく」と厳しく申し送っている。母亀代は「この度お前を遠方へ遣わずからには常々の教えをよく守らねばならぬ。また男子方も沢山居られるだろうから、万一身を持ち崩すようなことがあっては、第一御先祖様へたいして申し訳がない。また父上や私の名を汚してはなりません」とこれまた大変厳しい。英はこれに答えて「母上様、決して御心配下さいますな。たとい男千人の中へ私一人入れられましても、手込めに逢えばいざしらず、心さえたしかに持ち居りますれば、身を汚し御両親のお顔にさわるようなことは決して致しませぬ<sup>31)</sup>」と安心させている。当時、士族の志がいかに高かったかがよく伝わってくる。

錦絵にも描かれているように、江戸時代に培った儒教的精神が製糸工場では大いに発揮された。国のため、国家的独立を一身に背負って糸を採る姿がそこにあった。第二次世界大戦に突入することによって徳富蘇峰のような激励文もあるが、総じて富岡製糸場の工女は一貫して「いと車・・・」のもとに工女としての自負を忘れることなく糸とりに専念していった。

富岡の工女は誇りを持って業に専念することが出来たが、これと対照的なのが『日本の下層社会』(横山源之助)、『女工哀史』(細井和喜蔵)、『あゝ野麦峠』(山本茂美)、ジャンルは違うが近年関心が高い『蟹工船』などである。

富岡製糸場の工女の姿はある意味でエリート集団である。だが、西洋に追いつき追い越すためには資本蓄積の乏しい新生日本では全てが富岡製糸場のようなわけにはいかなかった。近代日本のなかではむしろ例外である。維新の大事業が成ったとはいえ富国への道は五里霧中であつた。新生日本の準備は計画通りには実行されず、むしろある場合には徳川時代のほうが良かったケースもある。資本をどこから調達したらいいかが焦眉の急であつた。たしかに、イギリスは強いからイギリスのように糸で活力をとすることは理解できても、先立つものは資本で

あるからどう調達したらいいかが緊急の課題であった。江戸時代ほとんど農業から賄っていたが新生日本もやはり地租が頼りで、近代産業の育成のための資本もまた身分解消としての元手も全て地租という形で調達せざるをえなかった。福沢諭吉のように貧困を脱出するためには農業を去れと云っても、他の産業が貧弱ではそうもいかない。それゆえ、依然として農村は地租という形で高率な税に甘んじなければならなかった。秩父事件に代表されるように、自由民権運動にすがったが中央集権体制は困民の窮状を聞くどころか暴徒として弾圧していったというのが実情ではないか。地租は軽減されることはなく、それどころか時代を下るにつれて増大していった。近代日本の窮状を物語る。農村が疲弊し身代限になると農家は一体どうなるか。田地田畑を一切処分しても返済に間に合わない。地租軽減を訴えても聞き入れられなければ、非常な手段しか残されていない。これが実態であった。多少余力は残っている者は糸取りとして女工に出すしかない。諏訪千本、野麦峠を越えて糸取りにやってくる女工は生き地獄を経験する。飛騨高山からまた諏訪からの野麦越えは悲惨きわまる。厳しい気象条件に阻まれ命を落とすことも稀ではなかった。まさに野麦峠は「生死業」への入り口、「女工哀史の碑」でもあった。糸引き歌を掲げておこう。

工場は地獄で主任は鬼でまわる検番火の車  
かごの鳥より監獄よりも 寄宿住まいはなお辛い  
ここを脱け出る翼をほしいや せめてむこうの陸（おか）までも  
野麦峠はダテには越さぬ 一つ身のため親のため  
うちが貧乏で十二の時に 売られてきましたこの工場  
よその会社は仏か神か うちの会社は鬼か蛇か  
飛騨の高山コジキの出場所 娘はキカイで血の涙  
工女工女と軽蔑するな 工女会社の千両箱  
男軍人女は女工 糸をひくのも国のため  
行こうか信州へ戻ろうか飛騨へ ここが思案の野麦峠<sup>32)</sup>

代表的なものを上げてみた。野麦峠越えは命懸けであった。ここに上げた歌は富岡製糸場で歌われた歌とは雲泥の差がある。諏訪千本、労働条件は過酷をきわめる。賃金も安い。家のため過酷な労働を余儀なくされざるをえなかった。本源的蓄積がそうさせたといってしまうまでもそれまでだが、とくに条件の悪い農村にはその厳しさに抗する術はなかった。「いと車・・・」の背後でぎりぎりの生活が同時に存在していたこともまた事実である。原製糸時代、花見に興じたり、赤飯を振る舞われたり、嫁入り支度を無料で提供されるという恵まれた待遇は、ここ諏訪千本にはない。

『日本の下層社会』にも前橋の製糸場の実態が述べられている。

「労働時間の如き、忙しき時は朝床を出て直に業に服し、夜12時に及ぶことも稀ならず食物はワリ麦6分に米4分、寝室は豚小屋に類し醜陋見るべからず。特に驚くべきは、某地方の如き、業務の閑なる時はまた期を定めて奉公に出し収得は戸主これを取る。しかして一カ年支払う賃金は多きも20円を出ざるなり。・・・・その地方の者は、身を工女の群に入るを以て茶

屋女と一般墮落の境に陥る者となす<sup>33)</sup>」。

さらに『女工哀史』は女工の実態を次のように歌っている。

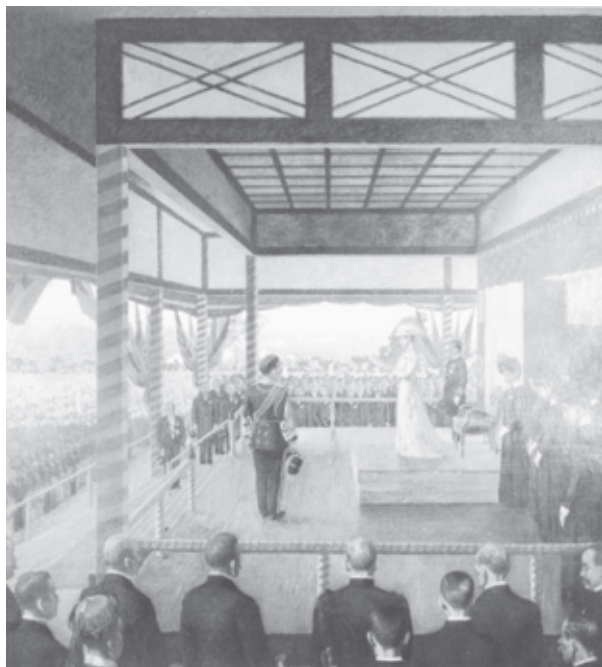
娘いまかと言われた時にや わが身ころは血の涙。  
 わたしゃ女工よ儂ない花よ 霜にいじけた小さな蕾  
 春が来たとして咲けもせず 小さい小さい片つぼみ  
 わたしゃ女工よ儂ない小鳥 羽根があっても飛べもせず  
 空が見えても籠のなか 羽交(つばさ)折られた小さな小鳥  
 わたしゃ女工よ春降る小雨 独りしょぼしょぼ音もなく  
 いつになったら晴れるやら つきぬ涙で濡らす枕<sup>34)</sup>

富国強兵、殖産興業の名の下に女工の汗と血の結晶が戦艦や大砲に変わっていく。日清、日露の戦争がそれを促進したと言えるであろう。まさに「坂の上の雲」を目指して関税自主権を獲得、治外法権を外すために、富の獲得はかよわき乙女の手委ねられねばならなかった。短期間のうちに行われたため矛盾が噴出することになったことは否めない。坂の下では土砂降り<sup>35)</sup>を身近に感じないわけにはいかなかった。重荷が女工に降りかかり、逃げ場のない苦悩は『女工哀史』また『日本の下層社会』として記録されることになった。『あゝ野麦峠』は時代を下るが対象は女工であり同じ視線で捉えていい。こうしたことを考えるとき、富岡製糸場の工女は本来の製糸場の姿(エートス)をあますことなく伝えている。

## 5. 富岡製糸工女のエートス

日本の近代化を語るとき、富国強兵、殖産興業、追いつけ追い越せ型の考えは一般的であるが、こうした路線は「坂の上の雲」型の近代化路線であろう。だが、幕末から維新にかけて横井小楠が考えた公議公論体制による下からの近代化もあったことも忘れてはならない。残念ながら、公議公論体制は近代化を急ぐあまり絶対主義型の集団に取って代わられてしまう。カール・レーヴィットがいみじくも指摘しているように、この路線は「日本の悲劇」でもあった。近代日本の戦争の歴史を垣間見ればこれが悲劇でなくて何であろう。下からの近代化を布いていればと悔やむ声が聞こえてくる。富岡製

写真4



赤十字社総会行啓(湯浅一郎画)、『聖徳記念絵画館壁画』より

糸場の正面に建つ徳富蘇峰撰による行啓記念碑は「いと車・・・」を讃えていることに変わりないが、昭18年という時期もあって工女に「爾来星霜70年いまや大事業聖戦に際し国家富強の実將に宇内に赫灼たらんとす」、聖戦ということで工女達を鼓舞している。おそらくここで述べられている「国家富強」と昭憲皇太后が詠まれた「富をたすくる道」、「けふのさかえ」とは雲泥の差がある。昭憲皇太后は拓かれた皇室として女子教育に力を注ぎ<sup>36)</sup>、さらに社会事業、慈善事業に力を尽しているが、とくに、日本赤十字社との関係は大書していいであろう<sup>37)</sup>。昭憲皇太后の「殖産興業」との関わりは近代日本が歩んだ「富国強兵」とはこれまた大きな違いがある<sup>38)</sup>。行啓記念碑の国家富

写真 5



広島予備病院行啓（石井柏亭画）、『聖徳記念絵画館壁画』より

強とも異なる。こう見てくると、昭憲皇太后の「いと車・・・」はむしろ横井小楠の公儀公論型に近い。皇室とはいえ下からの近代化に力を注がれたと見ていい。横井小楠がいみじくも言っているように、「堯舜孔子の道」「西洋機械の術」に近い。東京慈恵医院行啓、広島陸軍予備病院への行啓、赤十字との深い関係など上げれば、聖戦とは無縁であったといってもいい。

富岡の工女たちはたった一日それも数時間の行啓にもかかわらず、英のように「神様」扱いしているところを見てもう一つの近代化の道に通じるものがあつたと見なしている。公共的視点が工女達に感銘をあたえたに違いない。それは儒教的精神のもとに育った英をはじめ工女の精神に深く浸透していたものである。とくに「いと車・・・」は原製糸時代会社の「聖訓」として尊重され、企業の発展にあますところなく力を発揮することになった。片倉製糸にあつても「いと車・・・」が国産奨励に尽力したかをみれば、時代を下つてもその影響は無視しえない。

工女たちは「いと車・・・」を胸に「祈り、働い」たのである。それが工女たちの道 (ethos) であり、精神 (ethos)でもあつた。

(やまざき ますきち・本学名誉教授)

#### 〔注〕

- 1) 『和田英と富岡日記』（『近代群馬の思想群像』高崎経済大学附属産業研究所編、プレーン社、1988年、所収）。『近代製糸業を支えた工女たち』（『近代群馬の思想群像』高崎経済大学附属産

業研究所編, 日本経済評論社, 1989年, 所収)。『富国策と蚕糸業—堯舜孔子之道・西洋器械之術』(『近代群馬の蚕糸業』高崎経済大学附属産業研究所編, 日本経済評論社, 1999年, 所収)。

『東アジアの近代化と日本—和田英と富岡日記』(『高崎経済大学論集』第45巻, 第4号, 2003年。本論は2002年10月30日から11月1日にかけて韓国延世大学で開催された第7回東アジア実学会での同名の報告に加筆, 修正したものである)。『製糸工女のエートス—日本近代化を担った女たち』(日本経済評論社, 2003年)。『富岡製糸場の世界史的意義—日本近代化への道』ならびに『富岡製糸場と工女のエートス—和田英(富岡日記)の場合』(『日本絹の里紀要』, 群馬県立絹の里, 第11号, 2008年)。『市民の支援と産業遺産の関わり』(『群馬産業遺産の諸相』高崎経済大学附属産業研究所編, 日本経済評論社, 2009年, 所収)

2) 政治的な思惑もあって当初対象を広げたが, その後絞り込んだとはいえまだ不十分である点は否めない。ヴィジョンが示せないからである。なぜならば, プレゼンテーションが不十分であれば登録の道は険しくなるから, 一層の絞り込みは不可欠であろう。ヴィジョンをはっきりさせるためには, 富岡製糸場を中心にいくつかの遺産に限定しなければならないのではなかろうか。

3) 講演は2010年11月12日明治神宮創建90周年, 崇敬会婦人部創立70周年記念として行われた。崇敬会婦人部の機関誌「わか葉」(No.46.2011.3.)に講演と同じ題名で寄稿したが, 紙数に限りがあり意を十分尽くせなかったことが本論を改めておこすきっかけとなった。

4) 横井小楠の富国策についてはこれまで各種論文, 各種学会報告, 数冊の拙著で研究してきた。詳しくは業績一覧を参照していただくしかないが, 参考文献として以下の書籍を上げておく。『横井小楠の社会経済思想』(多賀出版, 1981年)。『日本経済思想史』(高文堂, 1981年)。『経済倫理学叙説』(日本経済評論社, 1997年)。『横井小楠と道徳哲学—総合大観の行方』(高文堂, 2003年)。

5) 代表的な拙著, 拙論を上げておく。

『製糸工女のエートス—日本近代化を担った女性たち』(日本経済評論社, 2003年)。『富岡製糸場の世界史的意義—日本近代化への道』ならびに『富岡製糸場と工女のエートス—和田英(富岡日記)の場合』(『日本絹の里紀要』, 第11号, 2008年), 『歴史と観光』(『高崎経済大学附属産業研究所紀要』, 第54巻, 第3号, 2010年)。

6) 『富岡製糸場誌 上』富岡製糸場誌編さん委員会, 昭和52年, 674頁。

7) 前掲書, 675頁。

8) 和田英『富岡日記』, 中公文庫, 昭和53年, 38—39頁。

9) 前掲書, 39頁

10) 前掲書, 43頁

11) 『富岡製糸場誌 上』, 1070頁。

12) 3泊4日の行程から考えれば, 数時間というのはあまりにも短い。しかし長ければいいというものでもない。数時間の間に多大なる影響を与えたこと考えればそれで十分ということになる。帰途には新藤を見学したり, 曾木の滝を見学したおり, 「作りなす滝にあらわで面白く於能(おの)れと落ちる音の涼しさ」を寄せ, 製糸場の外では「つみのこす桑の林に風たちて夕立すなり富岡のさと」を詠まれている。

- 13) 和田英『富岡日記』, 21頁。
- 14) 『富岡製糸場誌 上』, 1255頁。
- 15) 前掲書, 1255頁。
- 16) 磯貝みほ子氏の聞き取り調査「越後高田伊勢音頭風磬女歌富岡製糸所」, 『富岡製糸場誌 上』参照。解説で磯貝氏は新潟県上越市の磬女杉本キクエさん外二名に歌ってもらい、楽譜に移している。この曲は三味線の中棹を伴奏に用い、二上りの歌で、民謡音階、曲の出だしから八木節（厳密ではない）はかけ声が主で四拍子速度は大体Moderato、一ノ宮以下は二拍子で速度はやや遅くAndanteくらい。一節の言葉数は、七五が基本、一節が終わると三味線の細かい伴奏が入る。伊勢音頭風にアレンジされた富岡製糸所は高田磬女によって上州にもたらされた。田口峠や内山峠を越えて上州入り磬女は農村を中心に巡業した。磬女信仰は蚕や稲麦の豊作と結びつき娯楽の少ない農村部に浸透。村に着くと門付け歌を三味線に合わせて歌った。夜になると磬女宿に集まった人達を前に演奏が始まるが、その曲目の一つとして「富岡製糸所」が歌われた。磯貝氏は「当時、富岡製糸所の人気は非常に高く、またこのため富岡地方も活気に満ちていた。一方一ノ宮も伝統的な門前町で、宿場町でもあった。多くの旅人は一ノ宮や田島の宿に泊まった。
- 此の歌は当時この地方に流行していたものを巡業先の磬女が自分のレパートリの中に取り入れたもの・・・磬女の歌の中にはこの歌以外にも、巡業先の民謡や作業唄、当時の流行歌などを豊富に取り入れている。此の歌は彼女らの県外巡業の際にほとんど毎日歌われたとのことである。
- 此の譜のメロデーは・・・当時この地方に流行したものを比較的忠実に伝えていると考えられる」（1254頁）。富岡製糸場を盛り上げるためにも、是非三味線に合わせて歌って欲しいものである。本格的な登録に向けて弾みが見つかるかも知れない。
- 17) 『富岡製糸場誌 上』, 1168頁。
- 18) 前掲書, 1150-1164頁。
- 19) 前掲書, 1164-1165頁。
- 20) 前掲書, 1142頁。
- 21) 前掲書, 1169頁。
- 22) 前掲書, 1243頁。
- 23) 前掲書, 1244頁。
- 24) 前掲書, 1244頁。
- 25) 前掲書, 1247頁。
- 26) 富岡製糸場の正面に建つ「行啓記念碑」碑文, 徳富蘇峰撰。
- 27) 『富岡製糸場誌 上』, 1138頁。
- 28) 前掲書, 1069頁。
- 29) 前掲書, 326頁。
- 30) 前掲書, 329頁。
- 31) 和田英, 『富岡日記』 6-7頁。
- 32) 山本茂美『あゝ野麦峠-ある製糸工女哀史』（角川文庫, 1977年）資料1「糸引き唄」, 388

－405頁。

33) 横山源之助『日本の下層社会』(岩波文庫, 1949年) 175頁。

34) 細井和喜蔵『女工哀史』(岩波文庫, 1954年) 364頁。

35) 「民団新報」(2010年9月29日)は「検証NHKドラマ『坂の上の雲』」の特集を組み、「昭和軍部の暴走はここから」とし「自己破滅の要因が育ったと分析」している。と同時に、明治賛美の司馬史観にたいしても「司馬の問題点は昭和の軍部を指弾する反動のように、明治を讃える歴史観にある。そして、『坂の上の雲』の問題性はまさに、その歴史観が如実に反映されているところにある」と手厳しい。

2010年11月17日の「民団新報」は13日に行われた在日韓人歴史資料館(東京都港区南麻布)の開設5周年記念シンポジウム「韓日歴史認識の違い」を組み、龔徳相・歴史資料館長の「司馬遼太郎史観－坂の下はどしゃぶりであった」を取り上げている。龔氏はその報告で「明治の45年はジェノサイドの歴史だった。さまざまな論議についての贅肉をそぎ取り、あえて単純化してみると残るものは何か。植民地化の本質は暴力、差別、搾取だ」と強調している。真摯に受け止める必要があるだろう。

36) 『立憲政体略』、『国体新論』などで著名な加藤弘之の進講をたびたび受けた昭憲皇太后は西洋事情にも精通し、女子教育に理解があった。明治4年特命全権大使岩倉具視は、副使木戸孝允、大久保利通、伊藤博文などを伴って欧米視察に出かける。そのおり、我が国最初の女子留学生5名をアメリカ合衆国に留学させるが、この一行の中に後に津田塾大学の創始者である当時8才の津田梅子が含まれていた。昭憲皇太后は留学に際し「帰国した暁には日本女性の鏡になるように」と激励され、その後も、女子教育に力を注ぎお茶の水の東京女子師範学校をはじめ各種女子学校を行啓している。

37) 明治神宮・明治神宮崇敬会は次のように伝えている。「赤十字事業には深い御心が注がれ、日本赤十字社の総会をはじめ、数々の行事にご臨席されるなど赤十字思想の普及に努められました。……赤十字は戦時の傷病者に対してではなく、平時においても不幸な人々の救済をなすべきである」として「国際的な活動の奨励と振興のために、金十万円(今日の金額で3億5千万円)を寄贈されました。これを元に国際赤十字に『昭憲皇太后基金』(The Empress Shoken Fund)と名付けられた基金が創設されたのです」(「あなたのまごころを 世界の福祉のために」『昭憲皇太后基金』, 2010年)。

38) 昭憲皇太后は吹き上げ御苑に蚕室所を建て蚕を飼ひ養蚕の儀式を行っている。たんなる儀式の場ではなく糸を紡ぎ、綸子、羽二重を織らせているのを見ても、養蚕に深い理解を示していたかが分る。富岡製糸場への行啓は蚕室所炎上(明治6年5月5日)直後であった。昭憲皇太后の事績については神戸女子大学教授名譽米田雄介『一条美子－新時代の皇后を読み解く4つの鍵』(『歴史読本』特集天皇家を支えた女性達2009年12月号)を参照。